

## 新刊紹介

衣笠安喜著『思想史と文化史の間 東アジア・日本・京都』(ペリカン社、二〇〇四年)

桂島宣弘

本書は、二〇〇一年一月三日に急逝された本学名誉教授衣笠安喜氏の遺稿集である。周知のように、衣笠氏は一九五八年に本学大学院文学研究科修士課程修了後に日本史学専攻の助手に就任し、以後一九九五年三月に定年退職を迎えられるまで、助手・専任講師・助教授・教授として、四十年近く本学の教学にたずさわってこられた(八三年から二年間は文学部長)。一九七九年の立命館史学会の創設に際しても中心的役割を果たされ、一九九〇年から九二年にかけては会長も努められた。いわば、戦後の立命館史学、立命館日本史学を支え発展させてきた教員のお一人であり、数多くの教え子を研究者・教員・学芸員などとして育成・輩出し、日本史学界においても重要な役割を果たしてこられた。これからも立命館史学の、さらには日本史・日本思想史学の重鎮としてのご活躍が期待されていただけに、誠に残念な急逝であった。

衣笠氏の主要業績は、『近世儒学思想史の研究』(法政大学出版会、一九七六年)、『近世日本の儒教と文化』(思文閣出版、一九九〇年、学位論文)の二著に示されているとおりであるが、これに収録されていない重要論文や晩年の論考などを収めたものが、本書である。衣笠氏の研究分野は儒学思想を中心とした近世思想史研究であったが、儒者の社会的存在や文化的環境にも広く目配りをした文化史的視点を有し、また江戸を中心としがちな思想史研究に対して、京都や西日本からする視点を対置したこと、さらに近畿一円から西日本における自治体史の編纂・執筆をふまえた社会史的視点を有していたことなどにその特質があった。本書に収めた諸論考にも、こうした特徴が色濃く刻まれている。付言しておくならば、それは一九四八年以来の奈良本辰也、林屋辰三郎、そして前田一良、北山茂夫、岩井忠熊らによる在野の歴史学を掲げた「立命史学」において育まれたものであったことも看過されてはならないだろう。以下、紙幅の都合もあるので、本書収録の諸論考について簡単に一言ずつ紹介していきたい。

「序 近世思想史研究の四十年」では、衣笠氏の研究の歩みが、一九三〇年代から四〇年代の思想史研究、研究を開始した一九五〇年代の日本史学界と「立命史学」、一九六〇年代以降の思想史研究の動向にそってまとめられている。今日の立命館史学のたどってきた歩みを知る上でも一読が望まれる論考である。

第一部第一章「封建思想の確立」では、藤原惺窩、林羅山における近世朱子学成立の過程、中江藤樹、熊沢蕃山、山崎闇斎をとおしてみられる近世社会の朱子学受容の態様が詳論されている。第二章「折衷学派と教学統制」では、荻生徂徠から太宰春台にみる儒教道徳崩壊と室鳩巢にみる朱子学の変貌をへて形成された折衷学の思想的特質が論じられ、細井平洲の実践や朱子学の正学化と異学の禁をめぐる朱子学正学派・懐徳堂学派の動向など、政治的实践と思想との連関が論じられている。戦後初めて折衷学派に思想史的位置づけを

与え、学界でも大いに注目された論考である。

第 部第一章「日本の近代化と儒教」は、垂加神道・荻生徂徠・大月履斎などを素材に、人心統合・政治理念・個人倫理・風俗教化などの諸方面において、儒教が大きな役割をはたしたことが論じられている。思想の社会的機能という衣笠氏の視点が鮮やかに示された論考といえる。第二章「朝鮮通信使と日本儒学」では、朱子学の国民文化の素地を準備する機能、近代統一国家を文化的に準備する機能が、朝鮮通信使の影響との関連で検討されている。第三章「幕末京都の儒学界と私塾立命館」では、西園寺公望による私塾立命館の創設から閉塾にいたるまでの動向とその場にかかわった儒者などを丹念に追求し、幕末儒学の社会的機能が再検討されている。『立命館百年史』通史第一巻に収められた論考の再録である。

第 部第一章「頼山陽 山紫水明処を求める心」では、京坂へ遊学した頼山陽が、全国にひろがるようとする文化交流圏をもった新しい生き方をみせる文人として検討されている。第二章「矢野玄道の人とその思想 その京都時代について」は、平田篤胤没後門人の矢野玄道の幕末から明治初年にわたる京都時代の活動を論じ、玄道の国学思想全体の再評価を迫る。第三章「石田梅岩の思想と商人社会」は、『石田先生語録』をとおして哲学的形而上学的梅岩「心学」がいかにか具体的な日常的問題にかかわっていたかを論じ、梅岩像の再構成を試みている。

第 部「思想史と文化史の間」には、近世の思想家・文化人や思想史・文化史上の事象に関する論考が収められている。千利休、本阿弥光悦、藤原惺窩、中江藤樹、熊沢蕃山、野中兼山、山崎闇斎、木下順庵、室鳩巢、伊藤仁斎・東涯父子、貝原益軒、荻生徂徠、太宰春台、山県大弼、中井竹山、柴野栗山、松平不昧、佐藤信淵、廣瀬淡窓、河野守弘など、取り上げられた人物は多岐にわたり、どの論考にも狭義の思想史にはとどまらない人物の歴史的役割への目配りがみられる。また周囲の知的環境・文化的ネットワークがクローズアップされるなど、いわば衣笠氏の思想史研究の方法や立場がいかんなく発揮されている論考が多数収められている。

以上、既に四十年以上を経た論考も含まれているにもかかわらず、本書から今も学ぶものは少なくないが、何よりも歴史学・思想史学をめぐる方法論的議論が活発化する上で、また戦後史学史と立命館史学の関連を知る上で、本書は重要な一書となるだろう。

(本学文学部教授)